



## 「ハテナソン」

8月26日、「第3回考え、議論する 道徳フォーラム」(読売新聞東京本社主催、文部科学省委託事業)が東京都千代田区のみやま通り大手町ホールで開かれ、昨年12月

ら問い、自ら学ぶ」という課題にこたえられる新たな教育手法として注目されている。質問づくりの方法は、米国の住民運動の指導者、ダン・ロスステイン氏らが著した『たった一つを変えるだけ(MAKE JUST ONE CHANGE)』

サブタイトルも刺激的。

数十名のファシリテーターが会場に分散し、4〜5人単位のグループをつくって、演題に沿いながら3つのステップを踏まえた質問づくりを共に取り組んだ。

まず、①一人ひとりが質問を考え、たくさんつくる。話し合ったり、評価したり、答えをいったりしない。続いて、②つくった質問

は、「はい」か「いいえ」でしか答えられない「閉じた質問」と「はい」か「いいえ」ではなく説明が必要な

「開いた質問」にグループ内で振り分け、「閉じた質問」を「開いた質問」に置き変える。最後は、③皆で話し合いをして、質問を2つに絞り込み、まとめる。

「はてな」と「マラソン」を組み合わせたハテナソンの一端を通してながら、「質問づくりの方法」を学ぶ貴重な機会を得た。

## 「開いた質問」

「閉じた質問」と「開いた質問」について、それぞれの定義や長所・短所を事前に学習し、理解していれば、適宜適切に取り組めたのではなかっただろうか、ぶっつけ本番の状態で晒し者にされてし

まったような感覚に襲われたアクティブラーニング<sup>※2</sup>の体験が、今なお脳裏から離れない。

質問とは、「疑問点やわからない点を問いたたすこと。(例)質問を受ける」と辞書にある。

「何か質問はありませんか?」と不用意な問いかけをしてはいないだろうか。

質問には、「良い(優れた)質問」と共に「悪い(うざい)質問」や「質問が上手(下手)」、「質問の仕方が良い(悪い)」などがある。

質問と言いながら、揚げ足を取る(失言や失敗を取り上げて皮肉まじりに責め立てる)人の問いかけは、物議を醸しかねない不気味さに満ち溢れている。

「質問したら、十倍返し」の質問攻めにあうので、つい質問をためらってしまうとの声を聞く。

私たちの職場は、「質問づくりの方法」を学んできただろうか。

加えて、「たった一つを変えるだけ」とは何か、ということに疑問を持つ勇気を大事にしたい。

「大切なのは、疑問を持ち続けることだ。神聖な好奇心を失ってはならない」<sup>※3</sup>

肝に銘じたい。

転期に立つ経営の視座<sup>⑤</sup>

「たった一つを  
変えるだけ」

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。「継承と人材創造塾」主宰。『介護ビジネス』編集委員。介護福祉教育マスター。著書に『99の言葉の杖』(日本医療企画)、『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人材創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ! 経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

HP: <http://www.hayakawa-planning.com>

ブログ: <http://ameblo.jp/hayakawa-planning/>

26日の第2回開催に続いて、この度も足を運んだ。

前回同様、今回もハテナソン(Hatenathon)を取り入れたグループワークが行われた。

ハテナソンとは、「はてな」と「マラソン」を組み合わせた佐藤賢一・京都産業大学教授の造語。「自

(新評論)を参考にして。ロスステイン氏は、問いを発すること

ができないために必要な情報と社会的支援を得られない貧困層の大人を教育する手法として、質問づ

くりのグループワークを開発したという<sup>※1</sup>。「クラスも教師も自立する質問づくり」と記された本の

※1: 『読売教育ネットワークVol.18 (2016.08)』から引用

※2: 2017年3月号本稿参照

※3: アインシュタインの名言から